



志保八梨四扁  
四

箱 5  
508  
47





志以之四也

○謹按尾張國列東海道

東海名出日本景行紀訓奈天

第三矣古昔神武天皇東征之日天種子命

天兒屋命孫討海部佩室臣定國

成務天皇五年以小豐命

天火明命十世孫尾張連祖其廟在愛智郡

為國造後世回司也懸邑各置稻置

後世郡司也因分郡懸定邑里八郡蓋

自此尾張氏世為國造天武天皇御

宇以小子部連鉏釣任守

按大室令守一人從五位下ス一人



從六位上掾一人從七位上サスヒ目一人從八位下史ツヒト三負博ハカヒ士一人シ學生四十人

府本在ニ中島郡

今郡有國衛ノ庄松下村即司館

曰跡而俗呼ラ曰國衛カ畠

守ノ分等館於此治政施ス教後鳥羽院

御宇前右大將源賴朝及テ為都元師

請命別置守護一人以テ並ニ司執國務

後世武臣自立不待官命而私領郡

鄉ノ如斯彼氏織田氏ノ數家

斯波氏領國之際ニ遷ル侯官於同郡清洲

忠 今偽春日井郡

建城武衛源義統之時其臣織

田彦五郎某弒義統ヲ棄清洲城ヲ自レ此

織田氏專ラ國後贈相國信長住ニ于此

其子前ニ內大臣信雄又居ニ此然前ニ関

白豐臣秀次領ス之後福島左金吾正

吉則移住ニ寧

後陽成院慶長五年ニ封シ東照神君ヲ從三位前左近衛權

中將源忠吉鄉ヲ侯官清例城ノ下

同十二年ノ前ニ推大納言ノ襲封築大城



於愛智郡古<sub>コ</sub>屋庄<sub>ヤ</sub>遷<sub>ス</sub>于<sub>ニ</sub>候官<sub>ノ</sub>初<sub>メ</sub>今川  
左馬助源氏豐築<sub>ク</sub>之<sub>ヲ</sub>織田備後守平信  
秀奪<sub>リ</sub>之<sub>ヲ</sub>天文中信長居<sub>レ</sub>之<sub>ニ</sub>後使林佐渡  
守<sub>ヲ</sub>監<sub>セ</sub>之<sub>ヲ</sub>然後平岩主計頭<sub>ト</sub>引<sub>テ</sub>削<sub>リ</sub>朝臣親  
吉領<sub>リ</sub>之<sub>ヲ</sub>至此敬公始<sub>ラ</sub>移<sub>リ</sub>居<sub>ル</sub>宇<sub>マ</sub>先<sub>キ</sub>此<sub>ヲ</sub>神  
君幼子<sub>ト</sub>千<sub>キ</sub>君<sub>キ</sub>末<sub>ニ</sub>尾州<sub>ニ</sub>為<sub>ル</sub>平岩氏之嗣<sub>ト</sub>然<sub>レ</sub>  
慶長五年庚子三月七日早世也<sub>ト</sub>号<sub>ス</sub>高  
岳院<sub>ト</sub>  
○尾侯  
忠吉卿  
神君男也母宝臺院一品夫人天正

八年庚辰生<sub>ル</sub>号<sub>ス</sub>松平<sub>ノ</sub>下野<sub>ノ</sub>守<sub>ト</sub>  
文祿元年壬辰二月十九日賜<sub>リ</sub>武州  
忍城<sub>ヲ</sub>慶長五年庚子封<sub>リ</sub>尾州<sub>ヲ</sub>六年辛  
丑三月二十九日侍從從四位下  
十年乙巳四月十六日從三位左近  
衛權中將  
十二年丁未三月五日薨<sub>ス</sub>武府<sub>ニ</sub>享年  
二十八号<sub>ス</sub>性高院憲堂玄白公<sub>ト</sub>  
忠吉卿在<sub>リ</sub>清洲<sub>ニ</sub>  
敬公<sub>ノ</sub>諱<sub>ハ</sub>義直<sub>ト</sub>忠吉<sub>ト</sub>卿<sub>ト</sub>仲<sub>ノ</sub>氏<sub>ノ</sub>母<sub>ハ</sub>志水  
慶長五年庚子十二月二十八日生<sub>ル</sub>



攝州大坂始義

八年癸卯正月封<sub>三</sub>甲府君

十一年丙午八月十一日元服

同日右兵衛督從四位下

十二年丁未閏四月二十六日封<sub>三</sub>尾州<sub>一</sub>

十三年戊申八月二十五日受封<sub>三</sub>印<sub>一</sub>

十六年辛亥三月二十日參議從三

位兼<sub>三</sub>右近衛權中將

元和元年乙卯四月十三日娶<sub>三</sub>藝候

源幸長女<sub>一</sub>

三年丁巳七月十九日權中納言正三位

寬永三年丙寅八月二十日從二位權大納言

慶安三年庚寅五月七日薨<sub>三</sub>於東都<sub>一</sub>壽五十一

葬<sub>三</sub>于尾城<sub>一</sub>良應夢山<sub>一</sub>諡<sub>三</sub>敬公<sub>一</sub>祠<sub>三</sub>号<sub>一</sub>建

中<sub>一</sub>治世四十八年

正公諱光友敬公長子生母歡喜院吉田氏

寬永二年乙丑七月二十九日生<sub>三</sub>尾府<sub>一</sub>始光

七年庚午五月三日元服義

同日從五位上

十年癸酉九月五日右兵衛督從四位下

十六年己卯九月二十一日娶<sub>三</sub>贈大政大臣

家光公女<sub>一</sub>



十七年庚辰三月四日右近衛權中將  
同日參議中將如元

同年七月十一日從三位

慶長三年庚寅六月二十八日嗣封

承應二年癸巳八月十二日權中納言正三位

元祿三年庚午九月四日權大納言

同月十一日從二位

六年癸酉四月二十五日致仕

十三年庚辰十月十六日薨於尾城東

大曾祢別墅壽七十六

同月二十八日葬德與山謚正公祠

瑞龍

法号天蓮社順卷

治世四十四年

誠

公諱細誠正公長子母贈相國

承應元年壬辰八月二日生於東都

始細義延

宝八年七月  
初一日改細誠

明曆三年丁酉四月五日元服

同日右兵衛督從四位下

寬文三年癸卯十二月二十七日右近衛權中將

同日從三位

七年丁未九月二十六日娶權大納言源忠幸



卿女

元祿四年辛未三月二十六日參議中將如元

六年癸酉四月二十五日嗣封

同年十二月初一日權中納言

十二年己卯六月五日薨東都市谷館

享年四十八

同月二十四日葬於德興山謚誠公

祠号<sub>ス</sub>恭心<sub>ト</sub>

治世七年

公

御名吉通誠公御子生母坂崎氏女  
万々世

元祿二年己巳九月十七日生於東都

八年乙亥十二月四日元服

同日右兵衛督從四位下大樹殿下賜<sub>ラ</sub>名<sub>ヲ</sub>

於吉通<sub>ト</sub>

十二年乙卯七月十一日嗣封

同年八月十三日兵衛權中將

同從三位

○大明一統使覽云北直隸八符戶四十一万八千

七百八十九口三百四十一万三千二百五十四人

南直隸十四符戶一百九十方万二千八百八十人

九百九十六方七千四百三十九人



此南北二京戸口也其十三省戸口今略之ヲ  
我日本平安城洛内戸四万七千口五十万七千  
五百四十八人是延宝九年九月所數其洛外  
又殆足與之相北況朝廷官家武臣多キ  
非斯限又吾尾城下市井戸六子六十二口  
六万三千七百三十四人是元禄五年九月所  
數也

○我尾東瀬戸村の蜜器ハ友以多<sub>レ</sub>某<sub>レ</sub>制<sub>レ</sub>セ  
一と云々吾とす或人曰友以多<sub>レ</sub>一と云  
略<sub>レ</sub>糸多<sub>レ</sub>加友以多<sub>レ</sub>一と云一<sub>レ</sub>永年多<sub>レ</sub>  
完<sub>レ</sub>山道元入采<sub>レ</sub>の所<sub>レ</sub>も一<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub>異邦<sub>レ</sub>より

○礦家の制を習ひ故に<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>制<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>と云  
眷<sub>レ</sub>慶<sub>レ</sub>と号<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>と云

○點心唐史鄭修吏人之言唐ノ時俗語也

○温瓶 倭俗<sub>レ</sub>ハ脈氣<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>唐<sub>ノ</sub>崔令欽<sub>ノ</sub>教

○坊記<sub>レ</sub>ハ<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>と云

○人間郡堯夫人有潔病何也堯夫曰曾中  
滯礙而多疑耳未<sub>レ</sub>有人天生如此也初因  
多疑<sub>レ</sub>積<sub>レ</sub>漸<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>深<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>但疑  
心既<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>則<sub>レ</sub>万境<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>錯<sub>レ</sub>最<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>害<sub>レ</sub>道<sub>レ</sub>第一



事不可不知也 道山清話

倭寇多しぬいずきと云々のハ潔く病  
多し(実)と疑ひし(生)なり

○ 徳正三位太近衛の中務卿の朝臣ニヤシケ西蔵墓  
を築き又あり 元禄二年

水戸の海義公所を建て浪を録し  
たきふ

○ 大指津の岩前書たきふの申す二つを  
抄して遺忘を備ふ

○ 元禄辛巳の四月より(洛中)赤下口と云  
海螺を玩ミソウひ侍り吾々虎城下にも又もそを也

侍もれし九國の地を童子と云ふは其河上  
事ありしと云ふ長橋人との事じしとも  
侍りしは市河人(一)と稱し(二)は  
と地よりりきて抄りしあり(一)  
と死これ投書れ書りて(二)の(三)京  
可る人(一)と投書して終(二)多し(三)  
○ 辛巳六月廿九日朝まづ(一)京師(二)暴  
雷(三)雷し(四)凡(五)京中(六)赤下(七)河上  
一州(八)落し(九)院(十)の(十一)法(十二)二(十三)案(十四)の(十五)城(十六)中  
る(十七)人(十八)も(十九)落(二十)て(二十一)人(二十二)も(二十三)死(二十四)す(二十五)と(二十六)抄(二十七)り(二十八)し  
又(二十九)可(三十)る(三十一)落(三十二)る(三十三)至(三十四)主(三十五)の(三十六)民(三十七)も(三十八)雷(三十九)火(四十)を



燒  
傳  
人  
事  
也

○明水陸程限備覽ノ二日自<sub>リ</sub>教奠斷立極  
三才奠位<sub>ス</sub>黃帝疆理南北堯命禹平  
水<sub>キ</sub>分<sub>テ</sub>天下<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>九別五版舜分<sub>テ</sub>為<sub>レ</sub>十  
二州<sub>ト</sub>云<sub>々</sub>畧<sub>之</sub>文

秦三十六郡漢武帝為<sub>レ</sub>十三部一哀平  
際<sub>々</sub>三十六侯國二百四十光武侯國四百餘  
所<sub>レ</sub>晉分<sub>テ</sub>十九道<sub>ト</sub>唐為<sub>レ</sub>十道<sub>ト</sub>宋有四京二  
十三路元<sub>ハ</sub>十二省十八道明二京十三

省清改<sub>レ</sub>北京<sub>ヲ</sub>曰<sub>レ</sub>盛京<sub>ト</sub>改<sub>レ</sub>南京<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>江南  
曰<sub>レ</sub>江寧府<sub>ト</sub>十三省<sub>ハ</sub>依<sub>テ</sub>不改<sub>メ</sub>之<sub>レ</sub>人民  
悉<sub>レ</sub>遵<sub>レ</sub>北方滿州之俗大<sub>ニ</sub>改<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>明人笑<sub>レ</sub>我  
近<sub>レ</sub>世剃頭<sub>ヲ</sub>然<sub>レ</sub>今清人皆剃<sub>レ</sub>髮<sub>ヲ</sub>而僅留<sub>レ</sub>  
顛髮<sub>ヲ</sub>東西時俗有<sub>レ</sub>京<sub>ト</sub>運然<sub>ル</sub>乎

○又曰朝名公多<sub>ク</sub>厄<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>六十<sub>ニ</sub>韓思獻歐陽  
文忠司馬溫公王荊公蘇翰林而秦師垣  
亦<sub>々</sub>然<sub>リ</sub>云<sub>々</sub>楊<sub>方</sub>里<sub>録</sub>

我國自<sub>レ</sub>中世以<sub>レ</sub>四十二<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>厄年<sub>ト</sub>甚<sub>ク</sub>畏<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>世  
繼物語亦謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>東見記云<sub>々</sub>四二<sub>ニ</sub>之意<sub>也</sub>  
死<sub>ノ</sub>字倭訓四二<sub>也</sub>故忌<sub>之</sub>本<sub>ト</sub>無<sub>キ</sub>其<sub>レ</sub>據<sub>耳</sub>



















法人の我國の極と海峽と語るもゆゑ  
○ 度會延昌神主曰神代卷直指抄其説  
好別多し一以河人の述するも古物と  
とも不え是行らる書もたしつらぬ  
といひりるるし是くゆ

○ 海峽國語雜言毎年正月七日の  
人ともて是と稱しそをたを中  
ゆると里のらりゆすりて是とん  
まは是とをゆきめて或月太辰の社の  
ゆちをゆりぬ是異域淨土のゆち  
をゆつ後々進退の遺法ゆりま

○ 同國郷野郡侯者の社もゆりま  
ゆりしとそを掲げて是とん  
ゆりもゆりまはるの極ま  
事ゆりしとそを掲げて是とん  
社家のたのふまはるゆりま  
は風俗多かりしと今と断絶し  
まはゆりまはるゆりまはる  
ゆりまはるゆりまはるゆりま  
ゆりまはるゆりまはるゆりま  
ゆりまはるゆりまはるゆりま  
ゆりまはるゆりまはるゆりま  
ゆりまはるゆりまはるゆりま  
ゆりまはるゆりまはるゆりま



ゆれば印紙のゆかりとありて人々多うる  
朱子語類曰漢祭河用御馬皆以木為之  
按我朝神前献木馬繪馬者蓋漢ノ  
風也

○崇有徳報有功以立其祠先王為之  
後世有災殃則稱某宗立其祠祭之無論  
叛者不義夫不倫徳則天災至矣豈吳  
魂所為乎王臣不慮之昏愚甚也

○清和天皇貞觀十六年禁僧尼衣綾羅  
青白絹布或ありて今ハ僧尼も  
養服とありて志すべし

○今の世紀通とてふは漢華の虚儀と  
ゆかりと傳ふといふは流るるはては  
言とすうちと論ひつては利権の  
ため事とありて徒ら強要濟の小人あり  
何とぞとては治道ち門の津とて  
楽向とせば信代等と傳ふありとあり  
とあり我朝所道不<sub>レ</sub>言事久<sub>レ</sub>たむ  
儒臣とありとも又お代の偽道、流とて  
一々穆東の謹言とて心何の日の道  
ありんかひなる  
○方人よとては強きも地よとては







ともすこしと診なき事成りて後ありて  
大體と云ふ事なりといふ事ありて  
ありてむかひに御座りて御座りて  
家室に御座りて御座りて御座りて  
さるものなりとも御座りて御座りて  
と御座りて御座りて御座りて御座りて  
御座りて御座りて御座りて御座りて  
人々のそのことなりとも御座りて御座りて  
御座りて御座りて御座りて御座りて  
人々御座りて御座りて御座りて御座りて  
と御座りて御座りて御座りて御座りて

ちりちり高所をなれりて御座りて御座りて  
さるものなりとも御座りて御座りて御座りて  
と御座りて御座りて御座りて御座りて  
人々のそのことなりとも御座りて御座りて  
御座りて御座りて御座りて御座りて  
人々御座りて御座りて御座りて御座りて  
と御座りて御座りて御座りて御座りて

○慶長二十年七月 東照神君二條園白照  
實と議して 親王の御座りて御座りて  
其制曰  
三公下親王其故者右大臣不此等著舎人







○ 同くけてこそ事とつるやあくるどしと  
いふ拾遺集くもあつた物決するま  
るる好忠 實業の世に

○ 右衛門督のあつたの奇合の所の分  
りしつる

○ 五雜組曰官官之尊貴者趙高為中丞相  
龍澄樞為内天師然曰中内猶所以  
別於廷臣也

按五邦内大臣中納言其始中内之官

也後世皆為廷臣之顯官故昔日撰令之  
日不載内中之官

○ 正徹三夕の歌をいしつる  
いりしれもあつた人さるるれ  
いりしつるいりしつる

○ 張良韓のたれと鯨と報せん事とを命り  
しつる謝安運もあつた確と遊ん  
志しつるれも晋りつるて遊了列  
よは其官福と受しつるを  
名を好しつるいりしつる



涅槃經筆受の補助せしむるは凡そ賢人  
ありしありし通濫総目海異運有罪  
誨せらるる事なきは書法に依る所  
勿多所をんる

○精樂の伎これを倡優の艶曲と比すれど  
能く交りて放縱なれば忘劇教  
代の声あり今の音楽と精樂と比すれど  
又たその如くあるたし古の清音俗曲  
をいへばこれに示漢唐の教曲あり  
しと羯鼓箏箏等の胡声のみまて聖代  
の音楽異邦といふも甚清と云せり況

○我國に雅樂の風音を知るは孔子に自  
季紀の僂歎せし甚色の深養と云る人  
ありしは能く志んん

今世に法の声もその滋味の甚し  
なり俗をこれと云ふは異邦より  
けりしを各法と云ふは能く人なり  
○房中の邪術と細吟といふものあり  
難に細吟と教す所法なりと云ふ  
ものありしを今の細吟ハ金と云ふ  
もの鳴呼上人は是等の法と製して  
抑り淫吏多しこれ等と云ふは嬉戲







よありのちるの連方のあまて

○神功皇后誉田天皇を御誕生の時極の  
木を庭の地へ挿てその木は向ひたる  
極の木のちりてまじりてその木の御産  
所のちりて一紀よりのゆゑの意深の  
愚管抄よの事ありし按ずるよの丹祿  
の極樹の木の川へ移をりてその  
としのちりておのちりてその  
よのちりてそのの傍りて  
○皇朝類花三十六云馮瀛王カ詩雖ニ譏ト近  
而モ多シ義理曰窮達皆由命何勞發嘆

色ラ但知行ニ好事ヲ莫要問ニ前程ヲ冬去ラ氷  
傾津ニ春来ニ草目生ス請君觀ニ此理ヲ天道甚  
分明

○應仁天皇の玉冠伐ニて後之傳代  
の御頂ニよめててあるをしりてある  
よし東齊隨ニ羊ニありしげ玉冠も躰ニり  
たてまつりしる今の玉冠ハ唐の代  
製ニありしる

○尾張國志知吹火と婦子神社ハ宮養  
殿ニありし又り武ニの妃西道入  
眼とありし或ニありしる



傳習の流く異なりを

○學者欲觀中庸之書則須看近思存養一篇也

○秦始皇相と封して大吏として漢武帝

柳と大將軍と封して唐武后も亦柳と

ある大吏と封して五雜俎吾朝延喜帝臨幸と

の儀ありしやと皆門下の儀ありし交し

官封の名分の大なるものありしやと亦亦是

なりしをさへにらしてされ其柳は何なる

人らわれは關て可なりし流も其儀の樹も

は官とけし儀とありし何れを史し高しき

後世の人を色し又志しつるをよししこし

高爵とけし之道とありしをいれり我

てさるなりしをいれり

○馬子崇後帝と弒して河内縣に居ると封て

諡せしめしる名教のいふなりしなり

ひりしなりし我邦の學者これと筆して

して其罪を諡せしるも又道學のきり

ひしる故のいひせしめしるを辨して

古人の儀をいれり多しされし人の如

きなりしをいれりこししなりしなり

こししれたるがししなりしなり







書くべきなり又少野の文觀り流もゆる  
事としそ今い又これ多と神り社の約友  
おほくして秘記しゆるあふま

○對馬國下縣郡阿麻氏留神社山城國葛野  
郡天照御遷神社

是天照太神より天孫降臨の時  
供奉の神天日神命也

○壹岐國月讀神社及山城國葛野月讀  
神社

是亦月讀より天孫供奉の月神  
命也談島の社司紀如尚り迄多の名の

○来子山北紀行大賢遊覽之興感慨之心發  
於言示人其性情正學者所須玩

○攝季茂古今著聞集其神祇篇怪異  
とのほせり政道忠臣の篇少

らぬ事ともいふ一思ひ方々右左良  
實資のりりりて内門せき一幸匡房

の形をそ取らるるも形くは海れ  
事多しうるりいとあ

此の原五  
按すま天とひ



ソノ事とみことらうるものハ上世韓國我  
邦より〜と稱せし〜とん〜

可憎 元僧栢木庭

世間何者最堪憎

風蚤蚊蠅鼠賊僧

船脚車夫并脱母

爆炭湿柴水油燈

○ 乃改大臣憂之欲使太子

辭讓是時藤原三仁善大文諫大臣曰

家衆變事必不遂乎愛帝召信大臣

清談良久乃命以立惟喬親王之趣信

○ 大臣奏曰太子若有罪須廢黜更不還

無罪亦不可立他人臣不敢奉詔帝甚

不悅事遂無變無幾帝崩太子繼位

見羅山文集二十六

○ 稻麥の葉と葉の〜

〜と書〜

又牛室室も〜書〜長師鑿

〜鉄扒張天截ハハ

の〜

○ 妙見者北辰名也出七佛所說神咒經者二



俗書妙驗或明驗者非也

○尾張國分寺中島郡矢合村有其曰跡國分尼寺同郡法華寺村谷椿寺也按續日本絕國分寺号金光明天王護國寺國分尼寺号法華儼罪寺

鳥羽院天永年中六十余州被定天永寺

尾張天永寺春日井郡味鏡村護國院也

羨濃天永寺加茂郡細目村東光寺也

東光寺今在天梁村

波佐末岳仁紀以鏡字訓之

○湿地呼之曰久手用湫字按字書云湫北人呼

水池為湫者迹之類入鮎二十八箇心鮎四十箇

○天津神籬天付磐境

卜部系神籬神下之傳云其地係羅山

子於神籬信解折哀集辨之而破後人

之凱史以

但比毛呂者日室の謂日者御之意

神之御室也可秘之

○咒三首經

此中有摩利支天咒

私曰今武林以此天為軍神而有不

辨坐土說者上







之妻謫外人使其人裸躰解髮為鬼神  
欺李季令浴之事噫聖武之昏愚見欺  
奸后而建寺終身不察之曰之聖曰之  
武其号豈不虛文嗚呼

○日蓮黨所崇七面明神者申州身延久遠寺  
領守也七面者身延山一峯名也七面緣起  
為嚴島神又為無熱他神然其實辨才  
天女也不見日蓮之錄内外書及註盡讚未  
流以在身延山神祠故記事於日蓮而為  
附會妖妄之說惑人

○文明十七年九月八日於尾州清例城大追拂

城主織田備後守  
平政信朝臣

梅花之香のニルスの作

○薛文清公曰在古人之後議古人之失則

易處古人之位為古人之事則難

嗚呼議論他人長短不如者敬言自己可否

予每以薛子之言三復焉

○閑情小品曰讀未見書如得良友見已讀

書如逢故人

○因學紀聞曰龜山誌游執中曰嘗以畫驗之  
妻子以觀其行之萬否也夜八考之夢  
寢以下其志之定矣未也



夫学者修身之事耳李誠之所謂篤信  
好學守死善道吾輩八字歲者實不可  
緩也

○西湖志纂要西湖圖とのせは湖のまじり  
の山岳大つち代り我邦の事のり  
は多き事

○清本八坂古岡板より近き以て道志堂とい  
はるるて文字よりと事肆り

○竹生島都久夫須麻之轉語而假借字也神  
名式近江國淺井郡都久夫須麻神社者今  
竹生島也登市并島姫江屠妻并女天女

○信夫庄司藤原元治 是佐藤庄司而嗣信  
忠信之父也

○名古屋の城と今川左馬助氏今川義元  
之弟也

○八雲御抄八毛御抄下讀へて之

○宇佐八幡宮三所

應神天皇 神功皇后 玉依姫

石清水八幡三所

應神天皇 姫大神 神功皇后

右見八幡愚童訓

○工五五五五五五五五五五五五五五五五  
見南蛮小自鳴鐘



○摩多羅神溪坑拾葉集曰摩多羅神者即  
摩阿迦羅天也亦名摩密神  
神像按比叡山常行堂左手執鼓右  
手執蓑荷

○博古圖漢鑑有六花鑑

唐鑑有八花鑑

按吾邦所謂八花形鑑者蓋唐八花鑑

也真野時綱公八冠者八頭也頭即也

之謂而八之字畧スレハヤ也

○綿花と云ふは綿の字にハヤと云ふも草と

二程あり本綿ハヤと云ふは桐の如く

葉と胡椒と似たりと名づるも草此

綿ハヤと云ふは綿の字にハヤと云ふも草と

本綿といふは梵語都貝子加波羅と

と云ふは翻譯名義集に云ふ通鑑

梁紀の史始に款文及ハ大子行我補靴

耕稼等ハ本綿の事と云ふ也

むし海にたてて永保天正の比

異邦より又タ本綿といふは類聚國史

百九十九殊俗の如く綿種と崑崙の人

ハハヤと云ふは綿の字にハヤと云ふも草と



